

赤レンガの学舎

まなびや



2010年

4月1日 木 — 5月22日 土

大谷大学博物館 Otani University Museum

開館時間：10:00～17:00 (入館は16:30まで) 休館日：日・月曜および5月4日・5日
観覧料：一般・大学生：200円 小中高生：100円 (本学同窓生・在学生は無料)
〒603-8143 京都市北区小山上山総町 Tel. 075-411-8483 Fax. 075-411-8146
http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/museum/

2010年度春季企画展「大谷大学のあゆみ 赤レンガの学舎」 2010.4.1～5.22

毎年、春季企画展では「大谷大学のあゆみ」をテーマに、大谷大学の歴史の様々な場面を紹介しています。今回は大正2年(1913)京都小山の地に赤レンガの校舎が建築され、「真宗大谷大学」として新たに発出し、さらに大正11年(1922)大学令による大谷大学として「大谷大学」が設立された時代に注目します。

I 「真宗大学」から「真宗大谷大学」へ

- 1 印章** (「真宗大谷大学之印」・「真宗大谷大学図書館之印」) 2点
木製 印章
明治時代 大谷大学図書館蔵
真宗大谷大学で使用された印章。
- 2 真宗大谷大学卒業写真** 1枚
モノクロ写真
明治45年(1912) 真宗総合研究所蔵
東京巣鴨の真宗大学と京都の高倉大学寮は合併され、明治44年(1911)10月13日高倉魚欄の仮校舎にて開校された。本品は明治45年7月、仮校舎で撮影された真宗大谷大学初年度の卒業写真。学生たちが並ぶ後ろの柱に「真宗大谷大学講堂」と墨書された木札が掲げられている。
- 3 「知進守退碑」拓本** 1幅
紙本墨拓 軸装
明治34年(1901)：原碑
東京巣鴨に「真宗大学」が開校された記念として建立された石碑の拓本。東本願寺第23代門首彰如(句仏)の筆による。「知進守退」は、曇鸞の『浄土論註』に由来している。裏面には第2代学長南條文雄による真宗大学の沿革が刻まれる。この碑は大学の京都移転にもよる移設され、今も本学正門入って右手に建つ。
- 4 落成・移転式案内葉書ならびに式次第** 2点
紙本印刷・墨書 葉書・切紙
大正2年11月、小山の地に赤レンガ造の本館、講堂、図書館、寄宿舎が完成した。本品は同月9日に新築・移転を記念して新校舎大講堂において行われた式の案内状と式次第。本館・図書館では懇親会や古書展覧会が行われた。式終了後には余興として能楽、狂言が開催された。
- 5 真宗大谷大学一覧** 1冊
紙本印刷 冊子
大正2年(1913) 真宗総合研究所蔵
大正2年11月9日に挙行された落成・移転式で「真宗大谷大学一覧」は絵葉書や折菓子、模擬店(うどん、カントウ等)の券とともに、お土産として出席者に配布された。展示箇所は巻頭の写真。ほかに学則や現況、建築一覧が載せられている。
- 6 碩果航西詩帖** 1帖
紙本墨書 法帖装
大正10年(1921) 大谷大学図書館蔵
碩果は第2代学長南條文雄(1849～1927)の号。意味は大きい柿のこと。南條の生地大垣(おおがき)にちなんでいる。南條は、明治9年(1876)6月から明治17年(1884)5月までの8年間にわたりイギリスに留学し、その間、多くの漢詩を作った。本品は、その中から南條自ら20首を選び手書した詩帖である。巻頭に大正10年5月15日に書かれた梵字による七仏通戒偈があり、また、巻末に「大正十年辛酉五月二十七日、平安淳風坊の客様に在りて、航西雜詩の旧作を節録す」とあることから、大正10年5月の京都六条滞在時に書かれたことがわかる。本館初公開。
- 7 『梵文入楞伽經』**
紙本インク 膠紙
明治・大正時代
明治9年(1876)、南條文雄は笠原研寿(1852～83)とともに東本願寺第21代門首徹如の命によりイギリスへ留学し、西欧近代仏教学を学んだ。イギリスではオックスフォードにそり、マックス・ミュラーからサンスクリット文典を学んだ。そこで南條は梵語の原典研究に没頭し、漢訳仏典だけに頼っていた日本の仏教研究を一新した。明治17年(1884)帰国の際にマスター・オブ・アーツの称号が授与されている。本品は南條の自筆校訂原稿になる。

II 青写真にみる赤レンガ

- 8 デーヴァナーガリー文字活字字母** 1式
鋳造 字母
大正8年(1919)
デーヴァナーガリー文字は、サンスクリットやヒンディー語を表すのに使われる文字。本品は南條文雄の古稀記念型として『梵文入楞伽經』が出版されるにあたり鋳造された活字。字体が特殊であるため、当時の普通印刷工場では植字することが困難であった。そのため大学内に工場を設けて活字の鋳造や、植字、出版が行われた。
- 9 棟札** 1枚
木製 棟札
大正13年(1924)
大正13年9月23日の銘がある。赤レンガの校舎建築のち、増設された事務室のもの。
- 10 工事入札者心得ならびに仕様書** 5冊
紙本印刷 袋綴
明治45年(1912)
赤レンガの校舎をはじめ、舎監室、宿直室、生徒控所、尋源橋等を建築するにあたり、大谷大学建築事務所が作成した入札者心得書と仕様書。これによれば、本館のレンガは新たに作るのではなく、東本願寺敷地内に置かれていた中古を支給するので、それを用いるべしと記されている。
- 11 青写真「真宗大谷大学建築平面図」** 1枚
青写真
大正時代
新校舎は愛宕郡上賀茂村字小山(現 北区小山上山総町)に建てられた。当時から電線の終点であった烏丸今出川から北へ一望にひろがる田圃の中に西洋風建築がそびえ立った。正門は南側にあった。敷地内北には寄宿舎が建てられ、学生たちはここで生活していた。
- 12 写真「赤レンガ本館上棟式」** 1枚
モノクロ写真
大正2年(1913) 真宗総合研究所蔵
大正2年6月3日に撮影された本館上棟式の写真。
- 13 青写真「本館屋上塔二十分の一図」** 1枚
青写真
大正時代
明治45年(1912)6月に起工。レンガ造の2階建。建築はルネサンス様式を応用した。赤レンガにラインを引くように白御影石が入れられている。当初は左右対象に両翼部を持つ形状であったが、昭和56年(1981)に改築され、尋源橋と名づけられた。現在、国の登録有形文化財に指定されている。
- 14 写真「講堂工事」** 1葉
モノクロ写真
大正2年(1913) 真宗総合研究所蔵
講堂工事中の写真。
- 15 青写真「真宗大谷大学講堂之図」** 1枚
青写真
大正時代
本館の平屋造りで、外部はセメント・漆喰塗の石目形。様式は本館に準じられ、内部はお内仏を安置している関係もあり、和洋折衷のデザインであった。建造費は大阪の富豪家であり、東本願寺門徒の戸田猶七氏の寄附による。



- 16 写真「閲覧室工事」** 1葉
モノクロ写真
大正2年(1913) 真宗総合研究所蔵
閲覧室工事中の写真。
- 17 青写真「貴賓室閲覧室閲覧事務室図面」** 1枚
青写真
大正時代
図書館は校内中央に位置し、書庫、事務室、閲覧室、付属室の4棟からなっていた。貴賓室は木造の2階建て、1階が学生閲覧室、2階が教員閲覧室と貴賓室であった。学生閲覧室は60名収容可能。建造費は岩田惣三郎氏の寄附による。昭和36年(1961)親鸞聖人の700回御遠忌の記念事業として新たに図書館(現在の至誠館)が建てられたため、1階は食堂として再使用された。

- 24 『大谷大学新報』** 1枚
紙本印刷 新聞
大正13年(1924) 大谷大学図書館蔵
大正13年2月発行の大谷大学新報に掲載された「大谷大学学生募集」の広告。教授陣の名前や大学の沿革、大学全景と閲覧室の写真が載せられている。
- 25 『北京版チベット大蔵経』** 全359葉のうち
紙本木版 梵装装
中国・清時代(18世紀)
本品は寺本婉雅(1872～1940)が将来した北京版チベット大蔵経。寺本婉雅は真宗大学在学時にチベットに赴き、明治31年(1898)チベット留学を敢行したが、外国人迫害に遭って送還された。そして明治33年(1900)に陸軍通訳として中国に赴任し、チベット留学を果たした。大正4年(1915)真宗大谷大学教授に就任し、チベット語による近代仏教学研究の礎を築いた。

- 18 青写真「真宗大谷大学所属尋源橋之図」** 1枚
青写真
大正時代
大正2年(1913)京都に移転開校した頃、正門は南側にあった。この頃鞍馬口より北は広大な農地だったため、鞍馬口から校門まで専用道路が作られた。また紫明通に沿って疏水が流れていたため、ここに尋源橋が架けられた。当時の学生はこの橋を渡り通学していた。

- 26 『教行信証』** 6冊のうち
紙本墨書 袋綴
明治時代 大谷大学図書館蔵
山田文昭(1877～1933)は、明治39年(1906)真宗大学卒業後、同大学図書館に勤務。明治45年(1912)真宗大学教授に就任し、図書館長も兼ねた。史料を重視し、聖教・文書の影写書録や蒐集にこめた。本品は、丹山順芸が書写した坂東本「教行信証」を蒐前国丹生郡にある丹山順芸の自坊に赴いて転写したもので。

III 大谷大学の設立と樹立の精神

- 19 印章** (「大谷大学事務室」・「大谷文庫」・「大谷大学図書館」) 3点
木製
大正時代 大谷大学図書館蔵
真宗大谷大学から大谷大学へと改称され、印章も新しいものに改められた。
- 20 真宗大谷大学最後の卒業写真** 1枚
モノクロ写真
大正12年(1923) 真宗総合研究所蔵
大正11年(1922)年5月、文部省の認可を得、大学令による「大谷大学」が設立された。宗教や宗派の名称を大学につけることが禁じられたため、「真宗」の二文字を外し、「大谷大学」の名称を用いることになった。本品は、大正12年3月に撮影された「真宗大谷大学」最後の卒業写真。
- 21 佐々木月樞墨蹟** 1幅
紙本墨書 軸装
大正時代
佐々木月樞(1875～1926)は大正(1924)1月18日学長に就任。この年の4月に学制を改定して文学部が設置され、同時に専門部が開設された。本品の制作年代は未詳だが、筆の勢いから晩年の揮毫と考えられる。
- 22 「大谷大学樹立の精神」** 1冊
紙本インク書 原稿用紙(袋綴)
大正14年(1925)
大正14年入学宣言書における第3代学長佐々木月樞の自筆草稿。220字詰めの原稿用紙17枚にわたる。佐々木はこの「樹立の精神」のなかで大谷大学の建学理念をあらわした。
- 23 『漢訳四本対照撰大乗論 附西蔵訳撰大乗論』** 1冊
紙本インク書 原稿用紙
大正時代
佐々木月樞は、大乗仏教聖典の諸本を比較対照することによってオリジナルな思想を追求するという方法論を述べていた。本書は佐々木の『撰大乗論』の対訳研究で、生前に校正通りまで進み、没後、昭和6年(1931)山口益(1895～1976)によって刊行され、『撰大乗論』研究の基礎的な必須のテキストとなった。

- 27 『仏蔵経』** 1帖
紙本木版 折本
朝鮮・高麗時代(高宗29年＝1242)
舟橋水哉(1874～1945)は、明治44年(1911)真宗大学教授に就任、主に仏教史研究に専らした。大正5年(1916)仏教史料研究のために朝鮮に赴く。大正15年(1926)大谷大学教授に就任し、愛知・豊橋の自坊に「三舟文庫」を創設して書籍を広く一般に開放した。本品は本学が所蔵する「三舟文庫」の一つで、高麗版の『仏蔵経』。奥に「壬寅歲高麗國大藏都監奉勅雕造」の刊記がある。
- 28 『真宗学序説』** 1冊
紙本印刷 冊子
大正12年(1923) 大谷大学図書館蔵
金子大栄(1881～1976)は清沢満之に影響を受けて仏教思想を深め、大正5年(1916)真宗大谷大学の教授となった。本書のなかで金子は「聖人の教義を学ぶ」のではなく、「親鸞の学び方を学ぶ」のが真宗学であると述べている。この書の出版の背景には学制改正、特に「宗乗」が「真宗学」に改められた事に対する様々な意見の対立があり、金子は新しい時代の学問として「真宗学」を確立しようと提起した。
- 29 『The Eastern Buddhist』** 創刊号
紙本印刷 雜誌
昭和10年(1921) 大谷大学図書館蔵
鈴木大拙(1870～1966)は大正10年に妻ピアトリスと共に真宗大谷大学教授に就任。初年度は「禪の本質」や英語を担当し、仏教哲学者として仏典の英訳にも尽くした。教授就任の年、佐々木月樞、山辺習学、赤沼智善らとともに「東方仏教徒協会」を設立し、大乗仏教精神を海外に広く公開することを目的として『The Eastern Buddhist』を海外に刊行した。
- 30 『新刻按鑑演義全像三國英雄志傳』** 10冊のうち
紙本木版 袋綴
明・万曆年間(1573～1620) 大谷大学図書館蔵
神田喜一郎(1897～1984)は大正12年(1923)大谷大学の教授に就任、東洋学を教えた。喜一郎の没後、祖父神田香齋の代より蒐集されてきた古写本、金石文などの資料が本学に寄贈された。本品は、明の万曆年間、閩(福建省)の楊美生より刊行された長編歴史小説20巻である。
- 31 日本仏教史学 創刊号**
紙本印刷 雜誌
昭和16年(1941) 大谷大学図書館蔵
日下無倫(1889～1951)の蔵書。大正元年(1912)真宗大谷大学卒業の後、同大学図書館に勤務し、真宗史学文献研究に従事。大正12年(1923)同大学助教授、昭和12年(1937)に文学部教授を務めた。昭和16年龍谷大学の禿氏祐祥とともに日本仏教史学会を発足させた。本学には日下無倫の旧蔵書が「橋丘文庫」として所蔵されている。

今後の展覧予定

2010 6/8 ∩ 8/8	夏季企画展 インド仏像の流れと仏教美術の伝播 — 一畠中光享コレクション — (仮)
9/7 ∩ 9/25	秋季企画展 うつし 写の文化 (仮) 実習生展併催
10/13 ∩ 11/28	特別展 親鸞聖人展 (仮)
12/14 ∩ 2011 2/19	冬季企画展 京都を学ぶ 京の寺内町 (仮)